

卒業後の自分を想像する
センパイからのメッセージ



あ え まこと
阿江 誠 さん

元小学校教諭・元ボランティアステーション指導員

なが た ゆう と
長田 友斗 さん

平成18年3月卒業 / 小学校教諭



ふたりの出会いは、長田さんが教師2年目、阿江先生が主任で同じ学年団だった。「この人なら任せられる」「この人なら何を聞いても答えをくれる」…そんなふたりのつなぐストーリー。

スペシャリストと教師2年目

— お互いの第一印象は？

長 | 阿江先生は、**スペシャリスト**。専門性が高く、何を聞いてもすぐに答えてくださっていました。僕が教師2年目で全然わからないので、そういう意味でもすごく尊敬していて、好きにしたらいいよという感じで、自由にさせていただきました。

阿 | 長田くんは、教師2年目っていう印象はない。**落ち着いた**から。その時、長田君は体育担当。体育って、学校回さなしょうがないやん。そういう役割をすでに担っている人間っていうのは若くてもバタバタせえへんよな。そういう学校の大きい担当を持つと持ってない子と全然違う。学校は、全体見えなあかんから。全校生徒800人規模の大きい学校で、体育とかの行事を持つてことはしんどいやけど、間違いなく学校全体を見回したり、自分より

年上の人にもさせなあかん、これが勉強になると思う。遠慮はせなあかんけど、でも完全に遠慮してもたら学校が回らへん。これしてくださって言うのは、きちんと言わなあかんからね。

— それぞれの初任の時の気持ちは？

阿 | 右も左もわからへんし。誰一人知っている人おらんよ。そういう状況やったから、いろんな事考えている暇ない。てんやわんや。ようわからんけど、終わったなあ〜みたいな。

人間はいろんな人居るやん。しっかりしとる人たちは自分の考えがしっかりしとるから、それぞれが合わへんこともあるやん。その真ん中にポツンと入れられるって可能性もあるやん。それはそれで別のしんどさがあるなあ。みんなてんでバラバラやったらこっちもバラバラでおれるけど、しっかりした二人とかに自分がいて、もっと若い子とかがいたら、その若い子の同僚の面倒もちょっとくらいみなあかんという中で、その中でも別のしんどさある。

私は、**基本的には「人のこと気にしない」**。何か違うなあと言ったら、教師になるとみんな1年目で授業なんか2.3回しかしたことない人でも、親は「先生」「先生」って言う。そこが難しい。先生はわかっとなんねんけど、でももしかしたら他の親の方がはるかに授業うまいかもしれへんし、きちっとしてるかもしれへん。にもかかわらず、先生って呼ばれて、一応それなりの待遇というか、そういう対応されるわけやん。それがちょっと怖いというか、**えらいこっちゃな**、というのはあったね。

長 | ありましたね。授業も全然できなかった。僕、大学で全然勉強してなかったの。もっとしといたらよかったなって。教壇に立って、授業して、算数とかは何を教えるってほしいわかんんですけど、国語とか…ほんとに何を教えたらいのかわからなくて。

でも「先生」「先生」って。親からも相談されてもどうしたらいいのかわからなくて。

教師がしんどいのは 仕事量じゃない。

阿 | 実際、教師のしんどいのは仕事量じゃない。若い時は体力もあるし、何とかなる。仕事量多くてしんどくてやめるやつはそんなおらへんのちゃうかな。ただ今は、変な仕事が多いから、それが嫌で辞める人はおるのかもしれないけど。けったいな事務仕事とか。子どもに向き合う以外の時間とか、報告書とか。それを適当に出せないというか…。そういうのが、昔はなかったん。僕ら新任の頃は、そんな事務的な仕事は一切ない。だから子どもが帰ったら、たいがい暇。学年会があったりとか、職員会議がある以外は暇。ほかの先生とずっと遊んどったもん。

長 | 僕もここ数年は、かなり忙しいですね。

真逆の夢。「父親が一つの憧れ像」 「教師になる気はまるでなくて」

— なぜ、先生になろうと思われたのですか？

長 | 僕は父親が中学校の教師で、僕が小学校や幼稚園の頃から話を聞いていて。すごく大変な荒れている学校で。部活は柔道をしていて。それを見に行った時に、かっこいいなと思ったり。家でテストの採点していて、期末テストのマル付けしている姿とか見て、それが一つのきっかけですかね。**父親が一つの憧れ像だった。**

— それをずっと思い続けて、大学は兵教へ？

長 | 教師したいなと思って、勉強して何とか入って。大学ではテニスと人形劇。

楽しかったですね。でも勉強はそんなにしてないですね (笑)

— どんなことが心に残っていますか？

長 | クラブが一番大きかった。教師採用試験の面接に行った時まだ部活やっていたんで、教採の面接官、二次試験の時、「なんでそんなに黒いんですか」って聞かれて。「いや、部活しているんです」って。「まだしているんですか」って。部活と附属に行く実習がすごく楽しくて。1年間行ける実地。1年生担当やったんですけど、印象に残っていて。楽しかったです。持ってくださった先生がいろいろ教えて下さって、よかったです。

阿 | **僕は教師になる気はまるでなくて**。部活も高校3年の3学期までずっとやって。試験は受けたんやけど、大学試験とか受からない。勉強しなかったら落ちるんやと。それでも受かった大学、経済学部に行ってたけど、おもんないのよ。

なんで先生になる気が全くなかったかという、人格的に無理なのよ。その時のイメージね。なったらそんなこと全然思わへんねんけど、真面目で一生懸命で約束は破らない、そんなイメージ。あの頃の言葉で、聖職っていう言葉があっただけ。教師は聖職って。その言葉がどこかにあって、こんなものはなるもんじゃねえって、すごい思ってたんやけど、大学の生協で読んだ本が、石川達三の「人間の壁」っていう、超大衆的な作品。ほんまにそれが多分普通の教師だなと思ったのよ。教師とは本来こういうもんだなと。聖職なんてもんじゃなくて、必死にやってやっとこさで。それでも子どものことを思って色々やるんだけど、親にいろんなこと言われてうまくいかへんし、家庭も学校もうまくいかへんし、同僚もそんなにうまくいかへんという人が頑張っているというお話。その頃から、これは面白いな、これは魅力的だなって。要するに聖職とかいうものではなく、人間イコール教師というか、人間教師。泥臭い、人間臭い教師。それで受けなおして教育学部のある大学に行った。

結局、自分やねん。

否定の中に肯定を見る。

— 大学で過ごした中で悔いの残ることはありますか。

長 | 悔いに残っているのは勉強ですね。とりあえず単位を取りたいと思っていたので、その考え方はよくなかったのかなと今は思います。でも、教師になってからは、必要性を感じて勉強したんで、それはそれでいいかなと。

大学時代は、ずっとクラブをやっていたんですけど、4年生の時に、小野の中学校の部活指導で1年間ソフトテニス部に指導に行かせてもらって。それは、外部の者として実際の現場を見られて、中学生とどう接したらいいかとか、とても勉強になりましたし、楽しかったですね。

— 今までの教員生活の中で心に残っていることは、どんなことですか。

長 | 2年目のクラス経営の時に元気な子たちがいて、その子たちの悪いところがいっぱい見えて、そこをついつい突いてしまって、関係がうまく結べない。慕ってはくれるのですが、やっぱりうまいこといかなんかと思っていたのが大きくて。その時に母親から、父親は、「どんなクラスでも嫌でも持つ。どこでもいいから、最後残ったクラスを持つ。どんな子でもいいところを見つける。他の先生からしたら、あいつおったら嫌やなっていうクラスも、その子のいいところを見つける力があるのはすごいと思う」という話を聞いて。自分もそういう所はやっぱりしていかなあかんかと思ひ、その辺りから、自分の中で切り替えて、考え方を変えて、良くない面もやっぱり見えるんですけど良い面を見たり、認めたりしていきました。そうすることで、クラスの雰囲気も良くなっていきました。



↑ 出会った当時のお二人。長田先生は2年目だった。

— 切り替えて実践をしていくと、長田先生の中でどんなふうになりましたか？

長 | やっぱり声掛けが変わる。子どもの嫌なところも見えますけど、良いところを見ようと努力するので、子どもの見方が変わってきたとは思いますが。現在は、生徒指導という立場になったので、その考え方を周りの先生や子どもたちにも伝えていきます。

—（教員生活の中で心に残っていること）阿江先生はどうですか。

阿 | 失敗談なんて山ほどある。うまく行かへんかったときに、自分が楽になるためか知らんけど、ああこれは子どもが悪いとか、これは親の育て方が悪いとか、そういう風にどうしても流れたくなる。トラブルやから。そうなんやけど、結局、違うねん。自分やねん。そのうまいことでできへんかったのは自分やねん。自分が、きちっと子ども一人ひとりを見て、きちっとしてないから。間違いないねん。ほんまにそうやねん。それがしみじみわかるようになる。結局自分で。

でも、自分をそんなに追い込む必要はないねんで。だからそう思ったからってうまくいかへんこともあるんやけど、ただ、あの子がこうしているのには、あの子が悪いんじゃないくて、やっぱり自分のできることもあるし、周りを変えてやることもできるし、なんぼでもあるねん。あるんやけど、何かこう思い通りにいかへんかったら、どうしても人のせいにしたくなるんやな。それを、してたことがないとはよう言わんけど、ただ、そうしてよくなったことは1回もない。逆に、自分がもうちょっと考えてしてよくなったことは何回かに1回はある。だからそっちの方がええねんやろと思う。それも1年たったら、だいぶ大きいよな。結局その時は、そういう風に思わへんかったら、全部絶対あかんねん。だけど、違う様に自分が考えてやったら、何回かに1回は、ほっとするというか、ハッと思うときがある。うまくいったかもしれないみたいな。そんなんが、10回に1回あったらええやん。1年間あったら結構なもんやん。だから、そういう感じで思っとけばさ。子どもの見方が変わると、もっと子どもがかわいくなるよな。子どもがわかってくるから。なんであんなにしょうもないこと言うんやろとか、ほんま汚い言葉使うんやろとか、なんですぐに手出すんやろとか、そんなことを思うんじゃなくて、なるほどまあこういうことの裏返しとか、とか、こう思ってるからこうするんやとか、いろんなことがその子を肯定的に

見れば見えてくるんやんか。これ否定的に見たら、その時点で遮断やで。シャッター降ろしてしまったら終わり。だけど、肯定的に見ることによって、もっと見えてくるし、時々うまいこといく。そんな、夢のような急に変わるなんてことはないんやけど、時々うまいこといくねん。その連続じゃないの。いわゆる、否定の中に肯定を見るっていうかね。



かっこのいい言葉で言うかね。僕の言葉じゃないけどね。吉本さんやったかな。要するに、この子はやんちゃやけど優しいとか、そういう見方ではなく、やんちゃだとか、ごちゃごちゃしてるというその否定の部分の中に肯定を見るという。否定、これとは別に、こっちにこんなええところもあるからとんとんやという見方ではなく、この悪いと思われている人からあまりええと思われてない、ここの中に、この子の良さがあるという、そこにも良さを探さないと、というのが否定の中に肯定を見るという意味なんやけどね。時々おるやろ、あの子ほんまに変なことばかりしとるけど、こういうところあるからまあまあええやんということじゃなく、その否定されている部分の中にも、その子を肯定する部分がいっぱいあるというのを見つけようとする。あの子ここあかんけどここはええやん、だと、とんとんなのよ。そういうことじゃなくて、あの子あかんと言われとる中に、ものすごい、いい部分を探すと。そうすると、ずいぶん違うよね。

— そのいい部分を探そうというときは、どういう風に。教室内でというか。声掛けというか。観察というか。

阿 | よう見るということは大事やろな。その子を見とったら、わかることがあるのよ。見えへんもんが見えてくるのよ。見えてきたら、多分その見る目っていうのができるんちゃう。それが、あの子ならこうかなとか。もうちょっと広がってわかるようになるやん。なるほどなど。いろんなことが納得いくわけよ。

— それは1年目や2年目ではなかなか？

阿 | 無理無理。ただ、もう必死。一生懸命ほめて、一生懸命怒って。そんな感じやな。必死に怒って必死にほめて、必死。でも、若い子はそれでええんちゃうかなという気がする。思いっきり、好きなようにやったらいいと思う。言いたいことがあったら、遠慮せんとぼかーんと言ったらいいと思うし、ええことあったらええこといっぱい言ったらいいし、あんまり、1年目や2年目から、引いて物を見る必要はないという気がするけどな。

— 長田先生も引かずに行かれていたんですか。

長 | そうですね。

阿 | だから見えるもんがあるねん。引いとったら永遠に見えへん。そうちゃうかなと思うわ。偉そうに達観してたら。子どもってそういうところあるやん。引いてるやつはだいたいあかんのよ。

長 | そうですね。それはダメですね。入っていかないと。

阿 | 中にはそういう先生も必要かもしれへんで。職員構成の中では。管理職から見たらそういうこと

あるけど、そういうタイプはおったらいいなと思うけど、やっぱり。特に若いころは行かな。行って、あかんことから学ばなあかんのちゃうか。

わからへんかったら 聞いたらええねん。

— 1年目～3年目などの教師の人たちには、どういう考え方を持っていたらいいと思いますか。

長 | 職員室の雰囲気とか、大事だと思いますね。相談しやすいというか、できる環境というか。大学出てすぐは、何もわかってないので、余計に聞きやすいというか。相手の先生もこいつわかってないって思ってもらっているんで、聞きやすいところありました。

阿 | ほんまに、わからへんことは聞いたらええと思うねん。みんなわかってるやろと思って何年かやっていると、みんなわかってるやろと思って動いてるから、そんな中に入れられたら普通ちょっとしたらわかりそうなことでもわからへんやんな。わからへん人の特権は、人に聞けること。特に若い人。それは活かさないと。

大学でなんぼ勉強したって、現場の勉強なんかしてないんやから。現場に出たら現場の問題がいっぱいあるんやから、**わからへんかったら聞いたらええねん**。聞く力がある意味必要やねん。若い子にとって、すいません、わからないので教えて下さいっていう力は重要。確かにあの先生よりは俺の方がまだましかって思うことはあるけど、その人に聞かれへんやん。でもそこは聞いた方がいいねん。見とったら、こんなんでも先生しとるなあって思う人もおるんやけど、やっぱりちゃうねん。やっぱりキャリアっていうのは、無駄じゃない。だから、わからへんことは聞いた方がいい。

一 聞きにくいと思っていることもあるのでは？

阿 | 僕が心配するのは、今聞こうと思っている先生も忙しかったりすることもある。これが一番の難点。若い子が聞こうと思っても、忙しくしていて聞きにくい。だけど、忙しい人に聞いた方がちゃんと教えてくれる。時間の使い方上手いから、きちっと時間取ってくれたり、即座に教えてくれたり。忙しい人に聞いた方がテキパキきちっと的確に話はしてくれるんや。それをちょっと心配するのは、あんまり忙しくて若い子が聞くのに遠慮してしまうんかなと。わからへんのに、まあとりあえずこんなことやろうと、自分の中で納めて納得してしまって、聞かへん。そしたらえらい違ってたと。自分が思ってるのとえらい勘違いしてえらい目にあったということは、僕もあるよ。だからそれは、聞いた方がよかったと後で思うよな。ああ聞いていたらよかったと。だから聞いたらいい。



問題は、若い人はわからへんのやから、聞くのは当たり前なんやから、聞いた時に、きちっと対応したってなということを、管理職がある程度聞かれそうなやつらにはきちっと話をしとかないと。あと、気になっていることは、仕事に耐えられなくて辞めそうな子は、適当でいいから。学校を辞めんと、もう1年か2年おってみて。変わると思うな。見えないものが見えてくるし。すごくこの人について行こうっていう人が来られるかもしれへんし。この1年だけで清算してしまおうと思わずに、まあしゃーないと思ったら、子どもだけに集中して。

同僚はほっといてもいい。この人は信頼できる、この人について行こうという人がおったらいろんなこと聞いたらええし。

僕はやっぱり、この人の言うてることはすごいな、この人はええなあと思う人と、ただその人は自分の行こうとする線路上とは別の人になってしまうことがある。この人の言っていること正しいし、その通りやとは思うけど、自分の性格とか、自分のあれから言ってこの線路とは違う線路やと。だからこの人はすごいなあという人とは別に、自分が進みそうな線路の先にいる尊敬できる人を1人探す。この人の方が、すごいなあと思うけど、自分はその線路と違う線路におるなと何となくわかったら、自分に合った中で一番すごいなあと思う先生の中に聞きに行くとかね。それは自分らで考えたらええけど。とりあえず辞めなかったらええんちゃう。ほんま、簡単にやめすぎ。私に言わせると、たかが子どものこと、たかが親のこと、たかが同僚のことで辞めんとこ。もっと別の理由ならしゃーないで。ほんまに大変な理由とかなら。まあ言ったら、仕事の話。辞めんのはあほらしいで。辞めたい！と思ったら3年くらい。嫌で嫌でしょうがないと思っても3年。嫌なことは関わらんようにしてでも、やったら、多分変わると思う。簡単に辞めた人見たら、もったいないなと僕は思う。ええ力あるのに、少なくとも俺よりはええ教師になるのに、辞めるのもったいないっていう人を時々見るから。管理職も辞めへん方法考えんとあかんし、病んでいる子も、自分が辞めへん方法を。それ以外は何でもいいから。とりあえず辞めないことを目的にして。ええ先生になろうとか、テキパキ仕事しようとかじゃなく、とりあえず3年間は辞めへん先生でおろう。そうしていたら、変わるって。校長変わったら全部変わるし。すぐ命令してすぐ仕事振ってくる嫌な校長とか嫌な教頭なんて、長いこといない。先生よりも短いよな。異動2.3年やから。そんなん、やり過ごすことや。まともな風を浴びないこと。多分兵教の子は特に真面目やから、そんなこと言われても…っていう感じで受けるんやけど。

やり抜くことと、 リアリティの溝を埋めること。

— 社会に出て打たれ強く過ごせるために、大学4年間ではどう過ごすといいと思いますか。

長 | 他に何かやりに行くとか。クラブとか、実習とか、それは自分にとっては大きかったの。先輩とうまいかん時とかも、クラブでありましたけど、先輩に物申さないとかかん時もありましたけど、それでも**最後までやり抜いた**って言うのは一つ大きい自信にはなっていますね。

阿 | **やり抜いたらええねん**。上手にやり抜くのがしんどかったら、上手じゃなくてもいいねん。とりあえずやり抜いて。

兵教は、刺激が少なすぎる。近所の大学がそんなにない。だから、とんでもないやつが少ない。大学生ってもっととんでもないねんて。にもかかわらず、そのこのそういう刺激かな。いろんなやつおるやんみたい。それでその社会成り立つとるやんみたい。なることがあんまりないやろ。まあ既に高校くらいから、あんまりとんでもないやつがおらへん高校に行くと、とんでもないやつがおらへん大学に来てるわけやん。中学校くらいまではその辺がおったはずやけど。

だからそれを打破するにはどうしたらいいかという、やっぱり大学の構内に見つけるのは無理やから、**外へ出ていくこと**やと思うんやな。例えばボランティアでも、ごっつい大事にしてもらえるボランティアもいいけど、ボロカスに言われなあかんことをするのはええと思うよ。あの地域で大学生は貴重やから、どこに行っても結構大事にしてもらえるやん。それが大学生もバイトやったらバイトとしてちゃんと言ってくれる、時々無茶も言う、そういう環境って言うのは、大学生の間にあった方がええんちゃうかな。そこで、社会の縮図みたいなのを一回見といたら、先生ってみんな一生懸命やって真面目

なルール守る人ばかりやと思って入ったらとんでもないところやと。悪口なんか言わへん、ちゃんとしたええ人ばかりやと思っとったら、えらい目に合う。**学校やって社会の縮図**やな。先生は、まさにそういう考え方でおらないと。先生やからこんなことができるとか、こういう風になるとか、ほんまいろんな先生がいるから。それが普通やんか。それを違うように思って、理想を掲げて職場に行くのは一番怖い。だから、ボランティアでとんでもない地域のおじさんに出会ってたらだいたいぶ楽やろなと思う。無茶を言う地域のおじさんに大学のときに、避けられへん関係で。でも、その大学の避けられへん関係は、卒業したら縁も切れるんやから、気楽なもんやん。だから、そういう人らと接しといたら、だいたい免疫できるんちゃうかな。

そうじゃなくても、基本的に今の新任の子を僕ら見とって思うのは、リアリティショックっていうか、今までは夢と理想を描いて職場に入ってきたものと、現場とのギャップが、思い通りになってる部分もあるけど、思ってたんと全然違うギャップの部分もある。このギャップの部分、耐えられるか耐えられへんかで、辞めるか辞めへんか決まると思うんやね。でも**そのギャップを縮める方法は、大学の間に地域とか社会とかにちょっとでも出とくといい**。あんなやつおったおったみたいになつたら楽やん。初めて見るようなえぐい人じゃなくて、そんな人どこにもおる。でも自分が会って来てないだけで。大学生の間にそういう人も世間におると知ったら、だいたい違うと思うけどな。

そのリアリティショックの溝を埋めるには、やっぱり、大学の間の授業以外の外の部活も一つあると思うねん。年齢差のある集団やし、他大学との接触もあるやんか。そういう所があるかないかって言うのは、大きいと思うよ。よそ行ったらとんでもないやつおるやろ。その、とんでもないやつに出会ったかと。職場にもおるねんもん。たまたま自分が新任で行った学校におらんかったら、それはそれでええで。徐々に慣れていく方法があるから。たまたま

その人のところがほんとにファミリーファミリーして、ワイワイ言いながら楽しい3年間過ごしましたっていう間に、よその現実を聞いて、ちょっとずつ知って、実際にそういうところ行っても大丈夫って子はいると思うけど、いきなり行ったところがそういう戦場のようなところやったら、打たれて、とぼっち食らうねん。それで、しんどくなってしまふん違ふかな。だから、大学の間にそういうのに慣れておくか、とんでもなくいい職場に最初から入るか、この二つや。でもこれ自分で選ばれないやん。とんでもなく楽しい、家庭的な雰囲気は何やっても教えてもらえて自分も勉強になって、子どももかわいくてほんまによかった、って言う中で、今度しんどいところへ行っても、前の「良かった」が残ってるから、頑張れちゃうやん。ええとこ知ってるから。だけど、最初に行ったところがとんでもないところやったら、大学の間にとんでもないところに慣れておかないと。最初はそんなやつもおるやろと思えたら楽やけど。そこなんや。そんな、おるやろと思えたら楽やねん。そう思えたらね、どこでもやって行けそうやけど。

また、無茶苦茶わけのわからん親おるわということを経験していたら、こっちもそのつもりでおれるし。でも親なんか、よく話聞いてみたら、**結局自分の子がかわいいから言葉が荒くなったり態度悪くなったりするだけで、別に悪い人おれへんやん。**基本的にそんな悪い人おれへん。見た目は悪い感じの人で、評判悪かったり、おばちゃん仲間で悪く言われてる人であっても、実際に会ってみたらそんなことないな、ちゃんとわかってる人やねん。ただ、言葉の言い方が下手やったり、自己表現が下手やったりするから周りの人に誤解を招いたりする。そういうタイプの人とは全然悪い人じゃない。だから子どもも何も悪くない。そう思える時が出てくるやんな。これやねん。そう思えるようになった時点で合格。

— 長田先生、すごくうなずかれています。何が思い浮かべられたのですか。

長 | 阿江先生の話聞きながら、学生時代に加東市教育委員会とつながりがあって、そこでたくさんの方との出会いもあったし、その時は意識してないですけど、いろいろ学んできたなと今は思っています。

阿 | それがその年ではわからへん子はわからへんから、ある程度こちらが大学の間に仕掛けたらんとしゃあないと思うんやんか。そういうことがわかるのは、もっと後やもん。してたらよかったっていう、そういうことは後やから、やっぱりこちら側からある程度仕掛けていく。また、大学でちゃんとそういうことしてこなくて新任になった子は、新任になってからそういうこと経験させていかないと。

居心地のいい人間関係や 子ども同士のつながりを目指して。

— 長年教職に携わってこられて、これから長田先生は、どんな学校を作りたいですか。



長 | 子どもたちにもずっと言っているのは、みんなが楽しかったな、今日はこの子と出会えてよかったな、こんなことで良くなったなって思ってた家に帰れるような学校。そして、居心地のいい人間関係やもっと子ども同士のつながりができたらいいなと思いつつ日々過ごしています。

— 阿江先生が校長先生になられたとき、どんな小学校にしたいと思ったのですか。

阿 | まず、自分のやりたいことを学校のテーマ、目標にするわけ。前校長が一生懸命去年のものを継承して、「こんな感じで去年までやってきました、やってきました」と言うから、「いかん」と言って。ただ、管理職になりたいだけの人は、一応去年の先輩の校長先生のやり方を継承して、新しいことを一切考えへん。

でも、私はもう勝手に自分で全部変える。4年間校長したけど、校長は絶対に面白い。だから余計に1年したんやもん。退職の年に退職したんやけど、再任用で校長を1年した。普通はそんなしんどいことは、せえへんやん。給料が半分ほどになって、責任は一緒に、なんでそんなしんどいことする？って言われた。なぜかって、面白いで校長って。余計に1年したくなるくらい面白いって。結局は、自分のやりたいことはあるのは当然やけど、現場の職員もおるから、自分がやりたいこと押し付けるわけにはいかない。そんなことしたってうまくいかへん。自分らがみんなやりたいことあるから。そのへんの足したり引いたり、そういう所をやっていくのが面白い。あと、**第一に子どもが面白い！**

私は、最後の定年の年に、子どもらにサプライズで卒業式してもらった。

卒業式の練習の時かな、4、5、6年で入って、帰ろうと思ったら4、5、6の間に、1、2、3年が体育館に入ってきて。なんか今日あったって思った。そしたら、児童会が「校長先生の卒業式します」って。卒業証書もらって、PTAの会長から「ご苦労様でした」って花束もらって、「ありがとうございました」って言うて…。そして4月にまた戻るといふ（笑）。その時、教頭と相談して、「クイズ出しますから」って。

教頭…「今度、新しく校長先生が来られます。1番〇〇先生、2番〇〇先生、3番阿江校長先生。」

その後、僕全校生の前に出て行って、「阿江校長先生の後を継いで、私は阿江校長デラックスと言います。1年間よろしく願います」って。爆笑でしょ。1年生の子、デラックスとしか呼んでくれへんかったわ（笑）。

センパイたちから後輩へ

— 最後に学生たちにメッセージをお願いします。

阿 | 失敗を許される時代に失敗をしておくこと。それは失敗じゃないねん。それが、良い経験なわけよ。エジソンやったら、失敗は失敗ではありませんとか言っただけですみたいな。そんなたいそうなことかどうかはわかりけど、怒られたり、失敗したりっていうのを、たくさん経験するのがいいんちがうかな。そのひとつとしてボランティアはどうですかと思う。弱いな一っていう子いるけど、卒業するころには結構強くなっている子もおる。他のことで強くなってもいいと思うけど、選択肢の一つとして、ボランティアがあるんちがうかなという気はするね。部活でもいいし。部活とボランティアでもいいし。もうちょっと世間を見とくと、だいぶ違うかなと思うね。

長 | 阿江先生がおっしゃったように、自分の好きなこととか、挑戦してみたいこととか、どんどんしてもらえたら、良いかなと思います。その時は、将来役に立つかわからないですけど、将来なった時に、人付き合いとか、そこでチャレンジしたことが、今回これでいかせるなどか、いろいろ役に立つかなと思うので。

— 貴重なお話をありがとうございました。